

しかし、村の人達は口を揃えて可哀相と泣くばかりだったのだ。

そうこうしているうちに、その日が来てな、みんな涙のうちに、奇麗な花嫁姿に着飾つて、なおいつそう美しくなつた姿で、

「みなさん、お別れだね。お元気でなし。」

と言つただど。

そんな、村人は、鎌沼かまぬまに向つて送つただど。

天気は良かったが、一天いつてんにわからに雷鳴轟とどろき、天裂てんざけ雨こぼれる如ごとく嵐の音の中におふじさんの姿は無くなつていたのだ。

親兄弟はもとより、村人は泣く泣く家に帰つただど。

それから、四、五日たつての昼下がり、南西の空がひとときわ明るくなつただど。

村人は、何だべと見たれば、空から前よりいつそう美しくなつたおふじさんがたくさんの宝物たからものを持って舞まい降りてきたんだど。